

張元のこと ——『東宮西宮』を中心に——

下出 宣子

張元は、1990年代に中国映画界で特異な位置を占めた映画監督である。1989年に北京電影学院を卒業、個人で資金を集めて映画製作をはじめ、90年に第一作『妈妈』を撮った。未婚の母と知的障害をもった子供を描いたこの作品は、ナント三大陸映画祭審査員賞及び観客賞を獲得。同年「一块红布」など二本のビデオクリップがアメリカでアジア最優秀MTV賞を受賞、93年に『北京バスターズ』（原題『北京雑種』、92-3年制作）がロカルノ映画祭で特別賞を受賞するなど、デビュー間もなく脚光を浴びた（『北京バスターズ』が上映禁止になるなど、国内ではその作品の一部は公認されておらず、海外での評価が高い）。所謂「第六世代」を代表する存在であり、中国のインディペンデント映画の旗手として活動を続けてきた*。長篇映画七篇を監督しているが、総じて言えば、社会の動向に敏感に反応し、そこから題材を得て作品に反映させる、ドキュメンタリー指向の強い映像作家である。

恋人に妊娠を告げられて悩む無職の青年の、あてのない日常を描いた『北京バスターズ』では、社会の周縁に暮らす青年の苛立ちや反抗心が、崔健率いるロックバンドの練習場探し、ライブハウスでのコンサートなどを織りまぜながら、手持ちカメラで撮影したようなざらついた画面を多用したドキュメンタリータッチの映像で再現されている。93年、広播電影電視部により、インディペンデントの監督が映画制作を禁止され、張元をはじめとする六名がブラックリストに載せられた。それに対抗するように制作された『広場』（93-4年制作）は、六・四惨案の舞台となった天安門広場の、何事もなかったかのように「平穩」な一日を収めたドキュメンタリーである。人民解放軍兵士による国旗掲揚、それを見学する小学生、広場を散歩する家族連れやカップル、記念撮影する観光客、凧揚げをする人々…画面にはそれが淡々と映し出される。張元とスタッフはテレビ局の友人の力を借り、天安門広場を警備する公安警察の活躍を番組で放送すると偽って広場の撮影許可を取った。そうとは知らぬ公安の隊員がインタビューに応じ、広場を警備する任務の重大さと苦勞について誇らしげに答える場面もある。未見であるが、アルコール中毒の父親とその家族の

苦しみをテーマとする『儿子』(96)も、伝えられるところでは、ドキュメンタリー風の作品だという。さらに、昨年日本で公開され、中国の「英語熱」を伝える作品としてマスコミにも大きく取り上げられた『クレイジー・イングリッシュ』(原題『疯狂英语』、99年制作)も、自らが考案した英語習得法「疯狂英语」を掲げて全国を行脚するリー・ヤンの活動を追ったドキュメンタリーであった。

張元がこれまで取り上げてきた題材は、未婚の母と知的障害の子供、活動の場を制限されたロック歌手や無職の青年、アルコール中毒の父親、同性愛者、殺人犯の囚人など、社会から差別され白眼視される者、社会の「進歩」から「脱落」した者、あるいは「主流」に反抗する者たちである。張元は、これらの社会の周縁で生きていかざるを得ない人々に共感のこもった視線を向け、彼らを疎外し周縁に追いやる社会の構造を問題にしてきた。たとえば『北京バスターズ』の青年は、改革開放後の経済発展の中で社会から落ちこぼれ、「自由」は得たものの生きることを見失っている。『クレイジー・イングリッシュ』はちょうどそれを反転させ、社会の経済的発展と英語学習ブームに乗り金儲けに走る男と、時流に乗り遅れまいとその後を追う人々を取り上げる。一人の男の号令に合わせ「英語を学んで金を儲けよう」と手を振り上げ叫ぶ群衆の「熱狂」には、毛沢東の号令で「革命」に熱狂した群衆の姿が重なって見えないこともない。このような集団が新たな疎外を生み出すことを作品は暗示しているのだろうか。

これらのドキュメンタリー、またはドキュメンタリー性の強い張元の作品の中で、『東宮西宮』(96年制作、日本公開時の邦題は原題と同じ、ビデオ邦題『インペリアルパレス』)は、異色の作品である。それは一人の同性愛者が警官を愛し、警官の内に隠れていた同性愛を目覚めさせるという内容で、作家王小波と張元の共同脚本により、綿密に構成されたドラマとなっている。(映画脚本のほかには舞台用の脚本も二人の共同執筆。王小波の小説「似水柔情」は『東宮西宮』と内容が一致している。小説は雑誌などに発表されず、映画、舞台用の脚本とともに『地久天长——王小波小说剧本集』1998年、時代文芸出版社に所収される。先に小説があり脚本の原作となったのか、脚本を後に小説化したのかは不明。)

作品は、同性愛者たちが集まる公園で警察の取締のあった夜、公園内の派出所の警官小史と彼に検挙された同性愛者の作家阿蘭との「交流」を中心に進行する。派出所で小史に尋問される阿蘭が語る自身の過去の回想シーンには、昆劇で演じられる幻想的なシーン(美しい女賊が自分を捕えた役人を愛したという昔の物語。阿蘭が小史に送った小説のストーリー)が挿入されている。二人の動作や表情を通してそれぞれの心の微細な動きを、息の詰まるような張りつめた映像を通して表現し、両者の関係の変化が迫られている。それは二人芝居の舞台劇を連想させるが、現にこの作品は、戯曲としてブリュッセル、パリ、サンパウロなどの芸術祭で上演されている。

小史は、夜勤の無聊を晴らすため、幾分好奇心も手伝って、阿蘭に同性愛を「罪」だと認めさせようとする。同性愛は「間違い」（毛病）であると考える小史は、阿蘭を「下司」（「你呀，真是贱。」）と罵り、真人間に更正させようとする。阿蘭ははじめから同性愛者であることを認め、自分が「下司」であることも否定はせず、同性愛者として生きてきた半生を語り始める。阿蘭は以前に小史に捕まりそうになったときから、彼を愛していた。小史に拘引された時も阿蘭は逃げようとはせず、自分から小史に近づいたのであった。自分の同性愛者としての遍歴を告白することは、小史に対する愛の告白に等しかった。

阿蘭の告白に、「乗合バス（公共汽车）」と呼ばれていた、美しく寡黙な中学校時代の同級生が登場する。彼女は身寄りがなく、誰とでも寝るといふ噂をたてられ、そう呼ばれたのである。彼女は周囲から「下司」と見下され、その「罪」のために逮捕され闘争（文化大革命か）にかけられる。回想シーンで阿蘭は、校舎の階段の下に立ち、心を傷つけられ階段に座りこんでいる彼女や、廊下を追い立てられていく彼女に自分を同一化させるようにその姿をじっと見つめる。

阿蘭の告白は幼年時代にも及んだ。幼い彼はミシンかけの内職をする母の背中を見ながら、時計が鳴るのをじっと待つ。時計が鳴ると母は胸をはだけ、腰かけた自分と同じくらい背の高くなった阿蘭に乳房を吸わせる。待ちきれず、忙しく仕事をする母を邪魔すると、悪い子は警察に捕まえて連れて行ってもらうと脅かされた。警察に捕まるといふことに阿蘭は興奮し、警官が自分を捕まえに来るのを待った。警官が来るはずもなかったが、その言葉を聞きたくてわざと母の邪魔をしたこともあった。

父親の存在には触れられず、母親が後に再婚していることからみて、幼少時阿蘭は母と二人きりで暮らしていたようだ。阿蘭には愛情を求める対象が母しかおらず、その母の仕事の邪魔をして乳房を吸わせるようにねだる、愛情を求める行為が「悪い」ことで警官に捕まえられると脅かされたことにより、阿蘭にとって「愛」は「罪」の意識を伴うようになった。母との関係において、阿蘭は常にその支配に従順に従って愛されようとした。かなり成長しても母の乳房を吸うということからは、近親相姦的な愛情を帯びていたことをも感じとれる。警官に逮捕されることが夢となった、と阿蘭は語るが、警官とは、母に愛を求める「悪い」行為を罰してくれる人間＝父親の身替りであり、彼の同性愛の性向はこの時芽生えたともいえよう。作品自体が謎を解き明かしていないので、憶測の域は出ないけれども。

阿蘭は、中学の時初めて男子同級生と性的関係をもつが、その時彼は「僕は乗合バスだ」と相手に言い、相手が自分を辱め罰することを期待した。阿蘭は告白する、愛することは罰せられることであり、罰せられなければそれはもはや愛ではない、と。

継父に伴って行った（おそらく下放先の）炭鉱で、同性愛者であることを理由にひどい

暴力を受け、人格を否定されるほどの屈辱を味わい、一時は生まれてこなければよかったとさえ考える。だが阿蘭はこの苦痛こそが自分に生きていく意味を実感させる唯一のものだと思い、サディスティックな性行為を受け入れるようになり、彼の「愛」に纏わりつく「罪」の意識に助長され、それはしだいにエスカレートしていく。

ところで、あの「乗合バス」は阿蘭に、自分は誰とでも寝るような恐ろしい「罪」は犯していないと打ち明ける。だが、彼女は自分は生まれつき「卑しい(賤)」(「出身」が悪いということか、それとも両親が「反革命」の罪に問われたということか)のだから、そう呼ばれても仕方ないと言う。阿蘭によれば、彼女は従順だから美しいのである。たとえその批判が理不尽であっても、それを従順に受け入れて罰せられようとする「乗合バス」に、自分と共通の存在を見だし、阿蘭は彼女の苦痛や悲しみを共有しようとした。今では彼女は阿蘭の妻になっている。

阿蘭の告白にとまどい話の方向を変えさせようとする小史にかまわず、阿蘭は語り続ける。自分の権威と正しさを確信していた小史は、阿蘭に対し高圧的な態度で接するが、しだいに話に引きこまれ阿蘭に同情し、自分が「正常」であるという小史の確信はぐらつく。阿蘭の「愛」についての告白が、どんなサディスティックな行為も受け入れるところにまでおよぶと、小史は動揺を覚え、おまえは「おかしい(有毛病)」、「下司野郎」だと阿蘭を罵る。最初その言葉を否定しなかった阿蘭は、はじめてそれを強く否定し、「下司じゃない、これが僕の愛だ!」と叫ぶ。なす術を失い、同時に自分が阿蘭の側に引き込まれる危険を予感した小史は、彼を釈放し追い払おうとするが、阿蘭は「僕はあなたを愛している」、「あなたになら何をされてもいい」と言い、去ろうとはしない。手枷・首枷をはめられ雪の中を引き回され、檻に入れられ、その命さえ役人の手に握られた絶望的な状況で、女賊は無条件に純粋に役人を愛し、ついに役人はその愛を受け入れた、と阿蘭が語った通りに、小史は阿蘭の愛に抗しきれなくなる。

「お前の正体を見てやる」と女装を強要する小史に、阿蘭は、自分は女装することに生の意味を見いだす彼らとは違うと、それを拒む。だが阿蘭は、自分を捕えた警官小史との関係において、従順に支配され罰せられる者としての自分の存在を徹底的に追及し、小史を無条件で愛そうとする。一旦は拒んだ女装を自らして、あくまでも従順であろうとする阿蘭の姿が、小史を徹底的に相手を支配したいという欲望に駆り立てた。彼は阿蘭に手錠をかけて派出所から空きビルへ引きずっていき、乱暴にベッドに押し倒し、服をはぎ取りのしかかる。自分の内にあるサディスティックな衝動と、彼が「異常」で「下司」だと否定してきた阿蘭の愛に応えた自分の欲望を自覚した小史は、愕然として自分が乱暴に組み敷いた阿蘭から身を離す。

「あなたは僕ばかり責めるけれど、あなた自身は?」という阿蘭の問いに、小史は、自

分が「下司」と罵っている相手と自分自身が同等の存在であることを認めざるを得ない。自分の存在をかけた阿蘭の愛が、小史を彼自身の「正体」(実存)に向き合わせるようになったわけだが、ここには次のようなことが含意されているだろう。阿蘭の従順さは小史の暴力的な支配欲を剥き出しにさせた。阿蘭が中学の同級生に「僕は乗合バスだ」と言うと突然暴力的になり、後に阿蘭と関わった男たちも彼が相手に従順に従えば従うほどサディスティックになったように、他を支配しようとする人間の欲望は、相手が従順であればあるほど剥き出しになる。が、同時に小史が自分の同性愛を自覚したことは、阿蘭の告白を通して、それを「間違い」であり「不道德」だと否定する社会通念に囚われず、同性愛者がそのような生き方を選ぶに至った生の過程と接することで、同性愛を「異常」な性向だとする根拠がないことを知り、阿蘭への共感即ち愛を得たことを意味してないだろうか。

脚本には、「乗合バス」が阿蘭に自分がどんなに「卑しい」か見てほしいと、裸になるシーンが書かれている。時期は明記されていないが、中学時代と思われる。阿蘭の目に映った全裸の彼女には「卑しい」ところはなかったが、服を着ると彼女は「卑しく」なった、と阿蘭は小史に語る。「衣服」は何ものかを「異常」として排除する、つまりまったく異質な生活を営む人と人とが互いを理解することの障碍となっている社会通念の象徴であろう。阿蘭はその裸体を通して「彼女」を理解しえた。小史も包み隠さず告白する阿蘭の愛を理解し彼を愛するようになったのである。

張元がこの作品を撮るきっかけとなったのは、実際に行われた同性愛者取締であった。1991年5月から7月にかけて、北京東郊巷派出所の警官により、「健康研究」という名目で五十余名の同性愛者が検挙され、尋問、採血などが行われた。張元はこの事件を知り、「まったくでたらめな取締だ」と批判し、当初は同性愛者たちの現状を描いたドキュメンタリーを撮ろうと計画したのだという**。ドキュメンタリーとならなかった理由はともかく、王小波を脚本に加えフィクションとしたことで、張元はジャーナリスティックな興味に流されず、より心の深淵に足を踏みこみ人間の実存の問題に迫る作品を完成させられた。

『東宮西宮』に続く次の作品『ただいま』(原題『过年回家』、1998年制作。日本では『クレイジー・イングリッシュ』より遅れて今年正月に公開された)は、十六歳のとき義理の姉(継父の連れ子)を誤って殺し十七年間服役した女性が、出所を控えて春節に一時帰宅することになり、夫に遠慮して娘を素直に受け入れられない母親と実の娘を殺された継父との家族関係がいかにか修復されるかを描いたドラマである。この作品で張元は三人の作家に脚本を任せ、起承転結のある骨格のしっかりしたドラマを作り上げ、家族一人一人の心理を細やかに描き出している。

* 張元の経歴については、西安電影製片廠ホームページ「过年回家」参照

** 「陽光地帯」ホームページ「東宮西宮」参照